

第 3 回研究会

日時：2003 年 6 月 28 日～29 日

会場：京都大学

第 3 回研究会は、京大会館および京都大学総合博物館地図室にて開催された。また、その間に、京都大学東南アジア研究センターおよび京都大学文学部地理学教室に所蔵される外邦図について閲覧した。

2-1 外邦図作成の記録としての各種一覧図と、 地理調査所における外邦図の扱い

長岡正利（国土環境（株）,もと国土地理院）

本稿は、「第3回外邦図研究会」（2003年6月28日）での発表配付資料を基として、標記内容について再構成したものである。また、末尾の表（2ページ分）は、長岡（1993）に掲載の現存の外邦図一覧図をとりまとめた結果について、現時点での所在状況を加筆・修正したものである。

外邦図作成の記録としての各種一覧図とその所在

ここで言う地図「一覧図」（index map）とは、地図の作成地域の図郭割り図に、作成各図の図名や発行年などを記入したものである。

陸地測量部作成の一般販売地図についての一覧図は、当初から地図元売りの小林又七商店経由で店頭頒布されており、その作成状況は清水（1993）に詳しい。また、外邦図と軍用の秘密図を含む業務用の一覧図も作られており、内邦近傍に対しての陸地測量部の地図作成の総大成と言うべきものに、昭和19年版一覧図（長岡,1993）がある。

なお、「外邦」の見方は今日とは異なるので、上記の一般販売地図の一覧図には、今日一般に言われる「外邦図」の地域（朝鮮・台湾・樺太など）も含まれている。

作成された地図の全貌を知るには、その作成地図一覧図によるのが至便である。一方で、「地図一覧図」は測量成果ではないため、地図の「図式」とともに、近年まではその系統的な保存はされてこなかった。一般販売図の一覧図は上記のような事情で市中に出廻っていたので、個人所蔵を含めてかなりが現存するが、秘密図を含む業務用一覧図については、陸地測量部や関係機関においては消耗品として使われてきたため、現存するものは少ない。

外邦図作成地域を含む外邦測量全般については、『測量・地図百年史』（1970）に詳しい。これは、関係者の多くが存命していた時代に豊富な資料によってまとめられたものだが、現在では、そのとりまとめの基礎となった資料はあまり残ってはいない。

個別図葉単位での外邦図作成については、一覧図に当たるのが最上である。しかし、外邦図一覧図は、その性格から軍内部のみの配布とされて定数管理がされてきた（配布番号記入あり）ようで、旧軍やその学校所蔵だったものが、敗戦時の滅却を免れて個人蔵となっている程度である。まれには、それらが古書市場に出ることもある。例として、2002年秋の「東京古典籍入札会」では、外邦図の一覧図として豊富な内容を持つ、『北方地区目録』・『南方地域目録』（と

もに冊子体)ほかが一括して出品(忠敬堂より)された。

現存する外邦図一覧図では、国土地理院に多くのものがある。末尾の表1は、冒頭のとおりで、長岡(1993)の時点でとりまとめたものについて、2003年4月時点で再調査を依頼した結果である。

他機関での所蔵としては、国立国会図書館に若干の一覧図があって、その『蔵書地図目録』(冊子体出版物)中に掲載・利用されている。敗戦時の参謀本部にあった外邦図は、当時の関係者の尽力によって旧資源科学研究所や東北大学に移され、近年、さらに再配分された(岡本,1995;久武,2003)が、現有諸機関への聞き取り(悉皆調査ではない)によっても、それらの中に各種一覧図の系統的な所蔵はない。

なお、外邦海図を含む海図一覧図には、『水路圖誌目録』(昭和19年版,22年版,1999年版急速覆版海図;ともに冊子体)がある。

外邦図目録『国外地図目録』の由来並びに地理調査所における外邦図(初刷)の扱いとその行方

(1) 外邦図目録『国外地図目録』の由来

外邦図に関心を持つ者の間で、外邦地域を対象とした『国外地図目録』(4冊組)とその一覧図(紙版4冊組)の存在が知られていた。藍焼・製本のこれらは、作成され

た外邦図の全貌を知るに貴重な資料であることから、今回の科研費で必要部数が複製された。

この目録作成の由来と、目録掲載の対象とされた外邦図については長らく不詳であったが、このほど、陸地測量部・地理調査所・国土地理院を歴任された佐藤^{さかえ}氏がこの作成に係わられたことが判明したので、聞き取りによって、作成当時の事情を知ることが出来た。以下は、その内容である。

- ・昭和32・33年頃に、当時の防衛庁防衛研修所(昭和60年に防衛研究所と改称)戦史室から、資料整理用の経費を貰って、この目録を作った。
- ・同目録に表示の「防衛庁」欄の数字は、地理調査所での整理の結果、複数あった外邦図を同所戦史室に移管した枚数を指し、「地理調査所」とは同所に残した外邦図を指す。
- ・目録と一覧図は各4冊で構成され、5組作られた。防衛研修所に1組を納めて、残りは地理調査所に保存した。その後、偕行社(陸軍将校クラブ)にも渡った。国立国会図書館にも渡されていて閲覧できる。
- ・作成方法:「目録」は、外邦図各図を1枚1行とし、個別図名を記して所属一覧図との対象番号を記載した。
「一覧図」は、既製の各種一覧図(またはその写真複製)を台紙に貼るかまたは手書きで作って、外邦図1枚ごとの有無を表示した。

(2) 敗戦直後の陸地測量部と創設の地理調査所での外邦図などの扱い

敗戦時の参謀本部（市ヶ谷）における外邦図の持出し・保存・再配分については、前述の岡本（1955）や久武（2003）に詳しい。

ここで説明するのは、地図作成機関であった陸地測量部における保存用の外邦図についてである。外邦図に限らず、印刷した総ての地図については、「初刷」と呼ぶものを1部は残す規程があり、これは戦後も引き継がれている。なお、ほかには、「最終校正刷」が、次の版の発行までは残されてその後には廃棄される。敗戦時の陸地測量部各現場にあった印刷図多数は自然体で散逸したが、「初刷」については残すべく努力が払われた。

以下は、前述の佐藤侑氏談に加えて、『測量・地図百年史』（1970）および信濃毎日新聞連載記事（1995-96）とそこに登場の諸氏の話をも総合し、とりまとめたものである。

なお、本稿末尾に、用語説明や組織の変遷と関連業務などについての補足説明を、「参考」として付した。

1) 「敗戦時までの日本国内」地域の地図

地図を含む各種の資機材は、陸地測量部から長野県の梓村、波田村などに疎開されて、そこで業務の一部が行われた。なお、

20万分1帝国図原版の全部とほかの一部の図は、新宿駅空襲で被弾・滅失した。このため、戦後の20万分1図は、写真複製による1色刷の不鮮明な図として発行された。敗戦直後に軍文書類は焼却され、一部資機材も破棄されたが、地図はそのままとされた。

占領軍（米軍）は、戦後の日本領土の地図原図・原版・初刷とも、一切手を付けなかったため、そのまま稲毛（黒砂町）の地理調査所に運ばれて利用され、後の目黒移転時にはそちらに移された。なお、戦後しばらくの間、米軍施政下にあった地域については、後述の外邦図と同じ扱いとなったが、施政権が返還になる都度、原図が返された。後に、歯舞色丹も同様とされた。

2) 外邦図と、日本領ではなくなった地域の地図

それらの地域についての地図原図は、梓村花見公会堂で接收されて松本市の浅間温泉（接收に来た米軍の宿舎）へ移された。その総ては、新宿伊勢丹デパートに本拠を置いたUS.AMS, Far East（極東米国陸軍地図局；当初は第64工兵技術大隊）へそのまま送られて、後に米国へ運搬された。その返還は無かった。

外邦図の原版は重いので手を付けず、後に、疎開先の梓国民学校花見分校からそのまま稲毛へ運ばれ稲毛で接收された。AMSが新宿伊勢丹から王子に移された時期に新

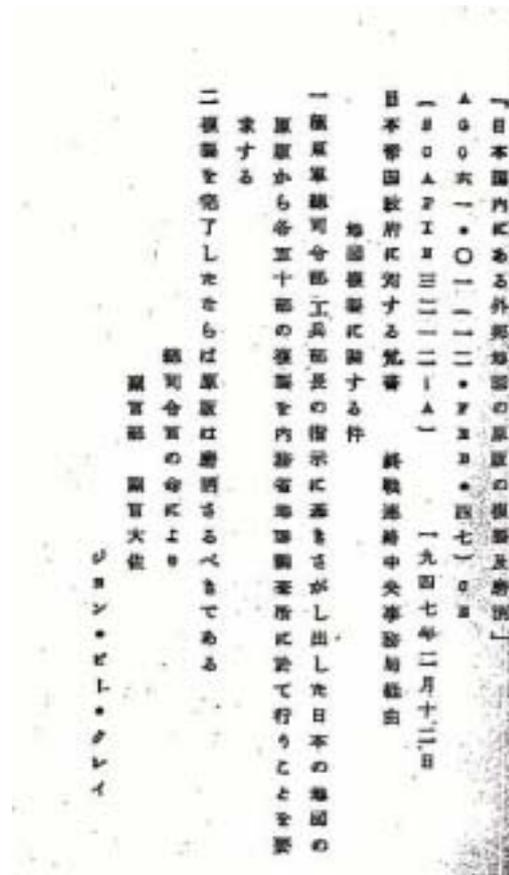


図1 外邦地図の印刷・原版処分に関する連合軍命令

たに印刷し、その原版は印刷終了後に返却され、破棄された。地図原版の全部は、重い亜鉛版であった。なお、地理調査所に対する連合軍命令「命により捜し出した外邦地図は原版から各50枚印刷して原版破棄」(図1)がある。

次に、その保存用「初刷」と、印刷図多数の扱いについて述べる。

各現場にあった印刷図多数は自然体で散逸したが、後に集められて、初刷と一緒に整理されたものもあった。組織的な焼却はないが、敗戦直後に焼いた現場もある。「初刷」は、明治大学予科校舎の陸地測量部で

梱包され、梓村花見公会堂に運ばれてそのままとなっていたが、接收を免れるために敗戦直後に高山市の関係者宅に移された。以下、初刷の行方の説明である。

昭和22年に、高山市から稲毛に移された。その後も、公式には「存在しない」状態が続き、所内で一部の職員に引き継がれていた。

昭和30年頃となって、開梱して整理され、内部では閲覧可能な状態になっていた。その総数は、約2.3万枚であった。各所に残っていた外邦図で、後に移されて来たものもあった。

その後、防衛研修所からの依頼があって、前述のとおり、整理したものの目録と一覧図を作った。そのころから、研究者などで、非公式で見に来る少数の人や、コピー請求も出始めた。

昭和40年代に入って、折からの反戦機運（参考3の中）の中で、ある幹部（某課長と、将官級の人物）が、「所蔵していると色々面倒だ」との考えで、上部の了解のもとに他に全部移管した。以後、地理調査所では外部からの照会に対して、「そのような地図はない」と言ってきた。

防衛研修所は、戦史編纂に不可欠な資料としての資料調査を進めたものであり、当時、同所でも、不足分を地理調査所から補って、外邦図の一式をそろえた（コピー複製を含む）。ただし、戦史編纂用資料であって、書込みなどかなり使われた。なお、現在の防衛研究所戦史部には、相当数の陸地測量部地図と水路部海図があるといわれているが、上記の移管外邦図ではない。

この移管外邦図は、1991年頃に実見したところでは、隅を金属で補強した柿渋引き紙箱（地理調査所当時に米軍から供与されたもので、航空写真用等で使っていた。約15×35×25cm程度）に整然と保管されて、そのまま経過している。一部を確認したところでは、『国外地図目録』と一致する。

このことおよび敗戦前後の状況から、これが、保存用「初刷」がそのままの形で残されたものに相違ないことが判った。このセットが外邦図としては最も完璧と思われ、

将来における公開が望まれる。

参考1：用語説明

原図：製図工程を経て、墨入れ・清絵されたもの。やや厚手の洋紙上に製図されている。

原版：各種のものがあり、明治期以来の彫刻銅版原版や、後の時代の亜鉛版が保管されていた。その後、原版はフィルム化される。

初刷：文字どおりの初版のほか、内容にわずかな修正等を加えた再刷版も「初刷」として保存。対して、保存義務のない「最終校正刷」があるが、殆どは散逸した。印刷直前の修正指示と点検確認印のあるもので、外邦図のうちで、国土地理院に唯一全図揃いで残っていた東亜100万分1輿地図はこれが大部分である。

参考2：敗戦前後からの組織の変遷と関連業務

昭和18年

- ・敗色漂う中で、タ作業（太平洋沿岸現地作戦用（本土決戦用）地図作成）が進展。
- ・外邦地域の地図は、輸送の困難性などもあって次第に縮小。

昭和19年

- ・タ作業を民間印刷会社にも外注。大日本、凸版、共同の各印刷会社。
- ・三宅坂から、明治大学予科校舎（杉並区

和泉)へ疎開。

昭和 20 年

- ・ 5 月 25 日：三宅坂庁舎は、空襲で大半が焼失。
- ・ 4～5 月：さらに、波田国民学校に疎開(総務課・第三課(旧・製図科)の写真製版と印刷)。ここで、輪転機 2 台稼働。

塩尻国民学校(第一課[旧・三角科]・第二課[旧・地形科])、梓国民学校(第三課の製図)、安曇国民学校(倉庫)、温明国民学校(教育部[修技所])。

なお、高山市(大井家)での印刷も計画された。

- ・ 8 月 15 日～：「状況ノ転変ニ伴フ作戰用地図処理要項」(8 月 19 日付け)で、地図焼却。

波田では、焼いた後で中止命令が来た。これについては、各種の話がある。(結果としては、各現場にあった印刷図はともかく、外邦図・兵要地誌図を含む軍事極秘以上の初刷も、保存状態のままで残置された。)

- ・ 8 月 31 日：陸地測量部廃止。
- ・ 9 月 1 日：内務省国土局地理調査所設置(看板の掛替え)。
- ・ 9 月 25 日：GHQ が調査に初来訪。その後も度々。

昭和 21 年

- ・ 3～7 月：千葉市黒砂(稲毛)の旧戦車学校校舎に逐次移転。

昭和 22 年

- ・ 12 月 31 日：内務省廃止、建設院など設

置。

昭和 23 年

- ・ 7 月 10 日：建設省設置,その付属機関に。

昭和 24 年

- ・ 6 月 3 日：測量法公布。

昭和 25 年 6 月 25 日～昭和 28 年 7 月

- ・ 朝鮮戦争及びその後の冷戦構造。

昭和 27 年

- ・ 4 月 28 日：サンフランシスコ平和条約発効。

協定による外国軍の駐留は妨げないとの規定(第 6 条)等にもとづいて、同時に、日米安保条約(昭和 27 年 4 月発効、昭和 35 年に改定新条約)。

昭和 35 年

- ・ 7 月：国土地理院に名称変更。

参考 3：主な米軍指令作業など

昭和 21 年

- ・ 1 月：基準点標石調査・復旧。
- ・ 2 月：地名調査。
- ・ 3 月：土地利用図作成、などなど、矢継ぎ早に指令。

昭和 28 年

- ・ 3 月 4 日：「地図作製及び測量の方針運用に関する取極め」

日本国内についての、測量資料の相互提供。

米国により作成中の基本図への援助。

完成後は日本が維持。

日本領土に関する総ての地図の相互交

換，各 15 部。

米側からの，測量用空中写真全国一式
2 組の貸与。新たに撮影のものは，そ
の都度，2 組を提供。

ほか，技術交換など。

昭和 34 年

- ・ 11 月 17 日：覚書，日米共同使用のため
の「5 万分 1 特定地形図」作成。39 年ま
で 454 面作成。（それ以前から，AMS によ
る日本北半の「5 万分 1 米軍地形図」作成
あり。）

昭和 40 年

- ・ 特定地形図を販売。昭和 37 年から前 2
者の，日本の地形図への「切替作業」
以上，政府間協定等による公的なもので，
非難されるものではなかった。

昭和 42 年

- ・ 5 月～：米軍への協力などについて，マ
スコミ・国会で問題視される。
- ・ 5 月 10 日：参議院予算委で佐藤首相答弁
「日米安保体制上（このような地図作成
は）やむを得ない。」
以後，マスコミでの問題視は沈静化。

文献

岡本次郎（1995）：地理学教室創立の年，『東
北大学理学部地理学講座開設 50 周年記念
誌』，64-74 .

清水靖夫（1993）：地図一覧図について．地
図，31（4），2-11 .

信濃毎日新聞（1995-96）：続・占領下の空白
「地理調査所」物語（12.23～2.14 の 30 回連
載）．

測量・地図百年史編集委員会編著（1970）：『測
量・地図百年史』，建設省国土地理院，673.

長岡正利（1993）：陸地測量部外邦図作成の
記録．地図，31（4），12-25 .

長岡正利（1993）：幻の昭和 19 年地図一覧図
- 陸地測量部内邦地図成果の総大成とし
て．地図，31（4），41-44 .

久武哲也（2003）：旧資源科学研究所所蔵の
外邦図との日本の大学・研究施設等所蔵の
外邦図の系譜関係．外邦図研究ニューズレ
ター，No. 1，15-20 .

2-2 清国陸軍学生と陸地測量部修技所： 日中間における測量技術の移転について

渡辺理絵（大阪大・院）・小林 茂（大阪大）

陸軍陸地測量部修技所は、明治 21(1888)年、測量技術者育成のために設置された日本陸軍の教育機関である。修技所は、明治末期から清国陸軍留学生を受け入れていたことは日本のみならず、中国においても知られている（『中国測繪史』1995 など）。しかし、修技所へ入学した経緯や母国での役割などについては、いまだ十分な検討がなされていない。

このような中、発表者は陸軍修技所在学生を撮影した写真を入手した。これらは、中国人留学生を中心に撮影され、写真裏に

は彼らの氏名が記載されている。

本研究は、これらの写真から得られた知見を報告するとともに、日中間で展開した近代地図作製をめぐる技術移転について検討することを目的とする。

修技所へ進学した清国留学生は、3年の測量教育を受けた。修技所への留学は、明治 37(1904)年から開始され、辛亥革命の起こった明治 44(1911)年まで、8年間継続した。その間の入学者数は総計 132 名とされている。これら留学生の氏名について、第 3・4 期生は入手した写真より、さらに第



写真 1 第 3 期清国陸軍学生 明治 41(1908)年

5 期生に関してはアジア歴史資料センターがネット上で公開している陸軍の修技所卒業生名簿(「大日記乙輯」)より抽出した。次に修技所卒業後の彼らの動向について追跡調査した。

写真1の下方には、「明治四十一年十二月陸地測量部第三期清国留学生卒業記念」と記され、第3期中国人留学生を写していることがわかる。修技所の教官とともに中国人留学生の姿が確認できる。写真1の裏に

も含まれている。写真2は第4期留学生を写している。写真の裏側には「明治四十三年(宣統元年)八月二十五日信州上諏訪に於て 第四期留学生ト共ニ写ス」と記載され、上諏訪で撮影されたことがわかる。留学生は各自スケッチブックなどを手にしており、測量実習中あるいは当時長野地方で進められていた五万分の一基本測図の作業過程であったと考えられる。写真3は、同じく第4期留学生を撮影した集合写真であ



写真2 第4期清国陸軍学生(明治43(1910)年)上諏訪にて

は、彼らの氏名が記載され、それによれば下段は邦人測量師6名および幹事、講師が座している。中段および上段の学生服を着している者が中国人留学生である。彼らの中には、のちに中国中央陸軍測量学校の校長となる李蕃や同校の教育長となる劉器鈞

る。写真下方に「明治四十三年陸地測量部第四期留学生卒業記念」と記され、写真裏には全員の氏名および職掌が確認できる。それによれば最前段中央には、陸地測量部長の大久保徳明を挟んで右側に中国陸軍学生監督の姜思治および左側に廬紹鴻が位

置し、その他は製図科長や地形科長、事務官などの要人が座している。二段目から三段目は製図科や地形科の測量手や測量師が位置し、三段目から最上段にかけて学生服を着している彼らが中国人留学生である。

最上段右から2人目に位置する黄郭は、1880年浙江省で生まれ、1904年浙江武備学堂に首席で入学、翌年、留日陸軍学生として浙江省から派遣を命じられた。はじめ東京の振武学校に入学し、同校では蒋介石と同学になっている。このうち数学が得意であった黄は、陸軍陸地測量部地形科に編入し、1910年、第4期生として卒業を迎える。母国帰還後、清国政府の軍諮府測量部地形科科員となるものの、辛亥革命が起こると上海に赴き、上海軍第2師師長に任命されている。翌年、南京政府が成立すると江蘇

都督府参謀長に指名され、その後、ワシントン会議中国代表団顧問や国民政府委員兼外交部長など国家的要職を兼任する。

3段目右から3人目の俞應麓も黄と同じく陸地測量部修技所の第4期生である。1878年江西省で生まれた俞は、少年時代、私塾で学び中学堂に進学する。1903年江西省武備学堂に進学し、2年後同省からの選抜で官費留学生として日本の振武学校に進む。その後、陸地測量部修技所第4期生として三角科へ進学。同じ頃、静岡の旅館店員と結婚し男児をもうけている。家族を残し単身帰国した俞は、江西省の測繪学堂学監となり、同校の学堂改組に尽力する。1912年以降は、近代地図作製や測地事業の職からは離れ、都督府の軍務部長および軍政司長などを兼任し、晩年には都督府軍事会議



写真3 第4期清国陸軍学生(明治43(1910)年)

最上段右から2人目が黄郭、3段目右から3人目が俞應麓

特派員や江西討袁軍司令部總監といった軍部の中核的な任務に奉職している。

修技所留学生の中には、帰国後、中央陸軍測量学校校長や山西陸軍測量局局長、江西省測量局三角科科长などに就任している者がおり、中国における近代測量教育および測量事業の中心的な役割を担ったことがわかる。また、上海陸軍参謀といった国家的要職に就いた者もいた。

留学生受け入れは、明治44(1911)年入学の第8期生で停止しているが、辛亥革命が起きた同年には、残る在对学生に対しても修業期間を残しながら退学が命じられている。このため、修技所への測量留学は8年という非常に短期間のうちに終了した。

ところで、同じ頃、日本から清国へ渡って各種技術を教授していた「日本人教習」が少なくなかった。その中には、測量技術教習も含まれ、清国の要請に基づいて、明治39(1906)年から広東省・四川省・江蘇省などの測量学校に招聘されている。この時期は、中国の測量学校がようやく全国的に整備され始めた時期であった。

以上から、日中間において、清国学生の修技所への留学、さらに中国へ渡っての測量教習といったかたちで1900年初頭、近代地図作製を前提とした測量技術の移転が非常に短期間のうちに行われたことが判明する。興味深いことに、辛亥革命後の中国では、日本の地形図(管見では明治33年図式)と酷似した地図が作製されている。

以上のような交流が日中間で展開した反面、日本軍は中国において秘密測量を行っていた。明治27(1894)年以降、非合法的な測量が実施されたことは『外邦測量沿革史』などからうかがい知り得る。今後は、こう

した二面性を考慮しつつ、さらに地図の作製と利用をめぐる中国と日本の関係について検討したい。

文献

小林共明(1984)「初期の中国対日留学生派遣について - 戊戌政変を中心として - 」辛亥革命研究4, 1-16頁.

小林共明(1985)「振武学校と留日清国陸軍学生」(辛亥革命研究会編『中国近現代史論集 - 菊池貴晴先生追悼論集』汲古書院) 277-309頁.

参謀本部北支那方面軍司令部編(1979)『外邦測量沿革史: 草稿』ユニコンエンタプライズ.

高木菊三郎(1961)『明治以後日本が作った東亜地図の科学的妥当性について』私家版. 中国測繪史編輯委員会編(1995)『中国測繪史』中国測繪出版社.

黄福慶(1975)『清末留日学生』中央研究院近代史研究所.

山田辰雄編(1995)『近代中国人名辞典』霞山会, 298~300頁.

陸地測量部編(1948)『陸地測量部沿革誌』陸軍参謀本部陸地測量部.

JACAR(アジア歴史資料センター)「清国陸軍学生卒業の件」(大日記乙輯 明治44年) Rf. C02031421800.

Howard L. Boorman, Richard C. Howard, editor. (1968): *Biographical Dictionary of Republican China*, New York: Columbia University Press, pp187-192.

2-3 兵要地誌と宗道臣（少林寺拳法開祖）の生涯

堤 研二（大阪大）

本報告では、兵要地誌の情報収集に従事した人物であり、中国におけるその活動と並行して拳法の達人を訪ね歩いて習得した拳技をもとにしてそれらを集大成・体系化し、日本少林寺拳法の創始者（開祖）となった初代・宗道臣の行動の軌跡の概要を追跡する。

今から約 1500 年前、ダルマ（達磨）大師によって、現在のインド・パキスタン方面から嵩山少林寺（現在の中国河南省にある）に拳法が伝えられ、その地では座禅と並行して拳技修行が為されていた、と伝説ではいわれている。また、その技術の原型は古代インド拳法である、という説もあり、阿吽二体一對の仁王像はその形式を表現したものである、ともいう。こうした拳技は時の権力の庇護ないし政治的な弾圧による栄枯盛衰を経験していった。

少林寺拳法の開祖である初代・宗道臣は、昭和初期において特務機関のもとで兵要地誌関連の情報収集をしつつ、義和団事件後の弾圧によって中国各地に散らばったり潜伏したりしていた各種拳法の達人を訪問しながら拳法の技を習得し、日本に帰国してから自身の武術体験をふまえて、技術を体系化・再編成した。これが少林寺拳法である。

現在の少林寺拳法の組織には、大きなくくりとして「少林寺拳法グループ」（総裁は宗由貴・二代目宗道臣）があり、そのもとに「財団法人・少林寺拳法連盟」、「宗教法人・金剛禅総本山少林寺」、「学校法人・禅林学園」の三法人と「少林寺拳法世界連合」

（WSKO）がある。少林寺拳法経験者（拳士）はその数約 140 万人、現役拳士は 10 万人から 14 万人くらいであるといわれている。

その技術体系は、剛法・柔法・整法（整骨等）の三法二十五系から成り、中国拳法・空手・柔術・柔道・合気道・サンボ・ボクシングなどの技術も参考にしながら編成されている。少林寺拳法は単なる格闘技ではなく、思想的にも護身術としての位置づけが為されており、経絡秘孔（いわゆる「ツボ」、「急所」）を重視する点などの特徴がある。

日本軍部ないしその関連機関による兵要地誌や外邦図作製に関する情報収集は、中国大陸においては、すでに明治 20 年代から非合法的に行われていた。のちに、こうした活動に従事していたため、殉職しても靖国神社に祀られなかった軍人たちを合祀すべきであるという運動が生じているが、その請願書などを見ると、実に多方面にわたって明治期以降の日本軍部が軍人を各地に派遣して諜報活動に従事させていたことがわかる。

兵要地誌が収録する情報は多岐にわたる。対象地域の気候・土壌・植生・地形などは細かい地点のポイント情報を含む場合もある。例えば主要な道路の地盤であるとか、海岸であれば、上陸可能な地形かどうか、という戦術的な記載事項もあれば現地住民の「鎮撫」、現地の風土病の状況と治療法・治療薬に関する情報などの記載がある。一口に「兵要地誌」といっても必ずしも統一

の書式があったわけではない。こうした兵要地誌に関する情報収集には、軍人だけでなく、非軍人の特務機関員やネイティブな人員の協力が不可欠であった。

本報告に関していえば、中国各地の地誌情報の収集を中国人と協力しながら特務機関の日本人が行い、その総括は関東軍司令官クラスが行っていたのである。具体的にいえば、土肥原賢二大佐(後に大将となり、戦後の極東軍事裁判判決によって絞首刑となった)のもと、いわゆる土肥原機関の兵要地誌班員として兵要地誌情報の収集に当たっていたのが、日本人の中野理男(のちの初代・宗道臣)であり、その中国人の協力者が陳良という人物であった。中野は陳と組んで、地誌情報の収集と各地の組織との連携工作をしていたようで、その合間に拳技を習得していった模様である。

中野理男は、1911(明治44)年、岡山県英田郡江見村(現作東町)に生まれた。少林寺拳法開祖・宗道臣として亡くなったのは、1980(昭和55)年5月12日である。

彼は、1925(大正14)年、14歳の時に、奉天(当時の呼称。以下、中国の地名呼称には当時のものを記していることを了解頂きたい)の祖父のもとへ出立し奉天中学を修了後に一時帰国し、家族の相次ぐ病没によって一人身になってからは東京の頭山満宅に居候する。中野は1928(昭和3)年、17歳の時に、再度満州へわたって土肥原機関のもとで情報収集などの仕事に従事した。この間に陳良老師と知り合って白蓮門拳を学んでいる。なお、情報収集に関しては中国の種々の秘密結社のネットワークを利用し、またその為に中国人協力者の存在が必要不可欠であった、という。

中野は、1929(昭和4)年、18歳の時に兵要地誌作成の為、彼のいう「満蒙大旅行」を行い、遼寧省・吉林省からハイラル・ハロンアルシャン・熱河省を回って各地に残る拳技にふれた。そこでは軍事用地誌の為の情報収集、各地の組織との連絡が主目的であったが、チフスに感染したことから、翌年帰国した。帰国・療養後、各務原飛行隊に入るも、1931(昭和6)年、20歳の時に心臓弁膜症の為に除隊を余儀なくされた。そこで関東軍囑託・奉天陸軍特務機関での業務を行うべく三回目の渡満を行った。

1932(昭和7)年、21歳の折到北京に移り、特務の仕事継続しつつ、文太宗老師の門に入り義和門拳を学んだ。1936(昭和11)年、25歳の秋に西安へ行く途中で文老師とともに嵩山少林寺に立ち寄り、「義和門拳21代師父」継承の式を行っている。

この後には、特務機関での仕事からは直接的には次第に離れて、瀋江省警務庁特務視察(鉄道警護隊員)となり、ソビエトとの国境の町、綏芬河に赴任し、さらに、1939年(昭和14)年、北辺振興計画に基づき新設された綏陽県の商工股(課)長となり同県商工会事務局長となって34歳で終戦を迎えた。

その後帰国し、その終戦時の体験をふまえて青少年育成を目的として、1947(昭和22)年、36歳の時に香川県仲多度郡多度津町において少林寺拳法を創始した。

少林寺拳法の思想では、拳技そのものの個人的な上達以上に「自己確立」と「自他共楽」の二つを重視して「理想境」・「平和社会」建設を大きな目標としているが、技術面だけではなく、この思想面にも兵要地誌関連の業務に従事した初代・宗道臣によ

る経験の影響が散見される。そこでは石原莞爾の影響(「協和」思想など)も見受けられるが、詳細な検討は別稿に譲りたい。

文献

石井(藤井)素介(2000)『三河紀行素描』、空間・社会・地理思想 5、pp.61-75。

神谷 誠(1995)『南方軍総司令部参謀部兵要地誌班回顧録 岡さのへち会記念文集』、創栄出版。

財団法人・少林寺拳法連盟(1997)『少林寺拳法五十年史』(第1部 正史) 同連盟(非売品)。

参謀本部・北支那方面軍司令部 編(1939)『外邦測量沿革史』(自 明治二十八年 至 同三十九年 断片記事) 参謀本部・北支那方面軍司令部。

参謀本部・北支那方面軍司令部 編(1939)『外邦測量沿革史』(明治四十年年度記事) 参謀本部・北支那方面軍司令部。

参謀本部・北支那方面軍司令部 編(1939)『外邦測量沿革史』(明治四十一年度記事) 参謀本部・北支那方面軍司令部。

宗 道臣(1977)『少林寺拳法 その思想と技法』、日貿出版社(第16版)。

宗 道臣(1979a)『少林寺拳法入門』、徳間書店(第3刷)。

宗 道臣(1979b)『少林寺拳法教範』、総本山少林寺・日本少林寺拳法連盟(非売品)。

宗 道臣(1997)『初版 少林寺拳法教範』(復刻版) 財団法人・少林寺拳法連盟(非売品)。

宗 道臣(1998)『秘伝 少林寺拳法 禅の源流・中国伝来の護身術』(カップ・ブックス) 光文社(第68刷)。

土肥原賢二刊行会 編(1973)『秘録 土肥原賢二 日中友好の捨石』、芙蓉書房。

中生勝美 編(2000)『植民地人類学の展望』、風響社。

秦 郁彦 編(2000)『日本陸海軍総合事典』、東京大学出版会。

福川秀樹 編(1999)『日本陸海軍人名辞典』、芙蓉書房出版。

藤原 彰 編・解説(1992)『外邦兵要地図整備誌』(十五年戦争極秘資料集 30) 不二出版。

源 昌久(2000)『わが国の兵要地誌に関する一研究』、空間・社会・地理思想 5、pp.37-61。

室賀信夫ほか・水内俊雄 解題(2001)『通称『吉田の会』による地政学関連史料』、空間・社会・地理思想 6、pp.59-112。

2-4 地図資料の用紙劣化対策についての一提言（話題提供）

源 昌久（淑徳大）

はじめに

本稿のタイトルに記載された話題の発端は、つぎの通りである。東北大学所蔵の外邦図中、複数枚あるものはダンボール箱約500箱に収納されている。これらのダンボール箱は資料保存上、問題を有するので中性ダンボールによって作製されたケース（箱）に換えてみてはどうかという企図から始まった。筆者は、資料保存の専門家ではないが、本研究会代表 小林茂教授からの依頼により、今回調査をし、標題の話題について若干述べてみたい。資料保存の研究者・関係者の視点からみると、おそらく拙稿の内容は常識的レベルであろう。

地図資料（一枚もの）劣化の原因

地図資料は、図書形態の資料と異なり、製本装丁の部分についての劣化問題は生じない。

（1）地図資料そのもの（内部）にあるケース

用紙の酸性化 化学的要因

（2）地図資料の外部にあるケース

- ・ 地図の取り扱い方の不慣れ
- ・ カビの発生
- ・ 生物による虫害等（例えば、シミ）
- ・ 不適切な修理材料（例えば、接着テープ）の使用
- ・ 温度と湿度の急激な変化

- ・ 紫外線その他の光線

（1）と（2）とが複合的に地図資料へ劣化作用をし、進行を早める。

資料保存の原則

原則としては、地図資料原形全体をそのままに保存しておくことである。多くの場合、このことが後で役立つことにつながる。地図資料のデジタル化（媒体変換のひとつ）も考えられるが、それは長期保存にとり難点（例えば、信頼性、コストの問題）を有している¹⁾。

保存方法

- ・ 保存（容器）箱への収納
- ・ エンキャプシュレーション（大型のパウチ）
- ・ 媒体変換
- ・ 専門的保存修復処理（クリーニング等）
- ・ 脱酸化処理

提案

- （1）外邦図の総合目録を編纂し、全国レベルでの重複調査を実施する。一表示区域一図幅ずつ選択する。
- （2）選択された地図で補修が必要な場合、保存修復処理を施す。
- （3）脱酸処理をし、調湿材を付した保存容器に収納する。なお、保存環境（室温 25度 相対湿度 40%）は大事である。

(4) 報告書を作成する。作業に用いた材料，
処置法を今後の保存のために記録する。

補節 ボドリアン図書館 (Bodleian
Library) の保存修補部門を訪ねて

筆者は、昨秋、2003年10月3日に英国
オックスフォード大学 (University of
Oxford) ボドリアン図書館の保存修補部門
(Preservation & Conservation Division)
²⁾(1978年設立)を訪問した。この訪問の
目的は、地図の保存方法の現地調査をする
ことにあった。ボドリアン図書館は英国の
コピーライト・ライブラリーのひとつであ
り、オックスフォード大学の中央館である。
保存修補部門は、マップ・ルーム (1946年
に Map Section 創立) と同じ新館に所在し
ている。保存修補部門補修製本課主任
(Superintendent of the Conservation) ロ
バート G. ミンティ (Robert G. Minte) 氏に
筆者は説明を受けた。保存修補部門は8つ
のセクションから構成され、各々が独自の
役割を果たしている。

(1) 資料の保存状況

本マップ・ルームの書庫に入室し、今回、
保存の観点から地図資料を観察し、説明を
うけた。

書庫内では地図資料 (一枚もの) の保管
は、水平 (横) 置きに保管することを原則
としている。しかし、スペースの問題もあ
り、製本して縦置きにしている場合もある。
地図は水平に収納する専用のキャビネット
(スチール製および木製) に保管されるもの
(一部、垂直式のものもある) や次項 (2)
でのべるような箱に収納されているものも

ある。専用のキャビネットに保管する際、
アルカリ緩衝剤を含んだ間紙を地図ごとに
挟むことはスペースを有するために行って
いない。その代わりに、一番上に収納され
ている地図の上に透明シート袋 (ポリエス
テル製) を置き、それが保護の役目をは
たしている。



写真1: Map Folder

司書ないし事務員が一枚ものを閲覧室等
に地図を運ぶ際、Map Folder (大型のバッ
グ (写真1)) を使用するとのことであった。
酸性紙や破損した紙への処置も本部門で



写真2: Urauchi 中の地図

対応している。筆者が見学を行っているとき、
作業室の入り口脇に “Urauchi” (裏打

ち・京都の表具師の指導により習得したとのこと)中の地図が据え置かれていた(写真2)。また、壁面には日本製の刷毛が懸けられていた(写真3)。

(2) 保存(保管)箱

マップ・ルームの書庫内では中性ダンボールを使用した各種の保存箱を活用していた。本部門は作業場(Workshop)を備え、保存箱を生産している(写真4・5・6)。外部の業者へ発注する場合もある。その例として、図1のようにロール状の地図を収納する Telescopic Cube Tubes (Conservation By Design limited 製)(図1)があげられる。本製品は筒の長さが80cmから最大150cmまで伸びるものである。この他に周囲のサ



写真3: 日本製の刷毛(壁面ボードに懸けられているもの)



写真4: 作業場(1)



写真5: 作業場(2)



写真6: コンピュータを通じて保存箱に直接、請求記号が印字されている。

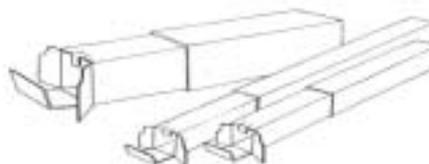


図1: Telescopic Cube Tubes .
出典: Conservation By Design limited
の製品ガイドによる。

イズの異なるものが種々ある。

筆者は大判の地図を収納した保管箱を試みに書架から下ろしてみた。それは予想以上に重量があった。保存箱のサイズ、収納枚数、置く位置等は十分に検討しなければならないと実感した。

注記: 補節の執筆には、2003(平成15)年度淑徳大学学術研究助成費の一部を使用した。

注

- 1) 原資料保存の考え方に近い意見がつぎの新聞記事に掲載されている。『日本経済新聞』2003年12月17日(朝刊)社会面(第44面)文化往来欄「デジタル記録の長期保存に難題」。
- 2) Preservation と Conservation は異なる概念である。Preservation は、資料の劣化を予防するための管理的・財政的配慮を意図している用語である。例えば、資料保存に良好な環境条件の整備。一方、Conservation は、資料の劣化を遅らせ、寿命を引き伸ばす作業(手段)を示す用語である。例えば、紙の脱酸化。